

長野県飯山市  
田草川尻遺跡

III

付 清川尻(小屋解)遺跡調査報告

1984.1

飯山市教育委員会

# 序

飯山市教育委員会  
教育長 浦野昌夫

飯山市秋津地区に所在する田草川尻遺跡は、縄文時代前期・弥生時代後期・古墳時代後期・平安時代と各期にわたる大複合遺跡であります。昭和47年静間バイパスの敷設により緊急発掘調査を実施いたしましたが、その後道路沿いに開発の波が押しよせ、昭和53年工場用地造成に伴い、第二次調査を実施したのであります。

昭和57年に入り、飯山市農業協同組合はガソリンスタンド建設の計画を立て、遺跡地の一部がこれにかかることが判明いたしました。飯山市教育委員会は県文化課と協議を重ね、工事の変更は困難であると判断し、緊急発掘調査を実施することにいたしました。調査によって、弥生時代・古墳時代・平安時代の遺物が出土し、遺跡がさらに広範囲に及ぶことが判明いたしました。

この調査の報告を「飯山市埋蔵文化財調査報告第9集」として公刊いたします。この報告書は今後とも広く活用され、人間の歴史研究の究明に参考とされることを期待して止みません。

なお、この調査に御協力いただいた地元の皆様をはじめ、飯山市農業協同組合の各位に深く感謝いたします。

昭和58年12月12日

## 例 言

1. 本書は、飯山市農業協同組合によるガソリンスタンド建設に伴う田草川尻遺跡の緊急発掘調査の報告書である。
2. 田草川尻遺跡は、長野県飯山市大字蓮字北原地籍等に所在する。今回の調査地区は大字静間字四本木2177・2178番地である。
3. 調査は、飯山市農業協同組合より依頼を受けた飯山市教育委員会が主体となって行なった。調査体制は以下のとおりである。  
調査担当者 高橋 桂（飯山南高等学校教諭）  
調査員 望月 静雄（飯山市立秋津小学校用務員）  
事務局 飯山市教育委員会社会教育係（佐藤正俊係長）・飯山市農業協同組合秋津事業所（岸田今朝男所長）
4. 現地調査は、昭和57年7月6日より同12日まで行なった。
5. 本書の作成は高橋桂・望月静雄が行なった。執筆分担は以下のとおりである。  
高橋 桂 第IV章  
望月 静雄 第I章～第III章
6. 本遺跡は過去2度緊急発掘調査が行なわれており、本書は従って三次調査報告として取り扱う。
7. 本調査に御協力・御指導いただいた方は以下のとおりである。厚く感謝申し上げたい。（敬称略）  
飯山市立秋津小学校（荒井連校長）・飯山市農業協同組合秋津事業所（岸田今朝男所長）・同理事猪瀬宏・同丸山篤・高橋多喜治・加藤孝夫・松沢芳宏・太田文雄 飯山市公民館秋津分館（常田正美分館主事）
8. 出土遺物は飯山市教育委員会が保管している。

# 目次

序

例言

第Ⅰ章 調査経緯	2
第Ⅱ章 遺跡概観	4
第Ⅲ章 調査	7
1. 遺物の出土状態について	7
2. 遺物	9
(1) 弥生時代後期の土器	9
(2) 古墳時代後期の土器	10
(3) 平安時代の土器	11
(4) 小括	12
第Ⅳ章 まとめ	13

## 挿図目次

第1図 遺跡位置図	3
第2図 遺跡全体図	5
第3図 調査区グリッド設定図	6
第4図 第一地点遺物分布図	7
第5図 第二地点遺物分布図	8
第6図 弥生時代後期の土器	9
第7図 古墳時代後期の土器	10
第8図 平安時代の土器	11

## 写真図版

図版1 遺跡遠景（東より）	
図版2 調査風景	
図版3 第1地点（南より）・第2地点（北より）	
図版4 調査風景・調査区	

## 第 I 章 調査経緯

田草川尻遺跡は、約10万平方メートルの規模を持つ大遺跡である。<sup>(1)</sup>昭和47年、この田草川尻遺跡を縦断するように国道117号線（静間バイパス）が建設されて以来、<sup>(2)</sup>除々に開発が進行する傾向を示している。昭和52年に行なった第2次調査も工場用地造成に伴うものであった。<sup>(3)</sup>

昭和57年、飯山市農業協同組合は新規にガソリンスタンド建設を予定し、遺跡地であるとの認識をもたないまま遺跡範囲内の約1,040㎡を予定地とした。そして工事契約を済ませたところ、市農協理事会において遺跡地ではないかとの発言があった。このため市農協秋津事業所長岸田今朝男氏、猪瀬・丸山両理事は飯山市教育委員会事務局を訪れ、経過説明とともに対処について協議を図った。6月17日、市文化財専門委員高橋桂氏、地元研究者松沢芳宏氏、市農協岸田・猪瀬・丸山3氏および市教委佐藤は現地確認のうえ、秋津事業所において打ち合わせを行なった。その結果、費用は原因者負担とし、発掘体制は市教委が対応することにした。最終的な調査面積は県文化課の指導を得るということで合意した。

6月23日、県文化課臼田指導主事の派遣をいただき協議を重ねる。その結果、遺跡包蔵面に影響する石油類埋設タンクの部分約100㎡を調査することとした。

調査体制は、飯山市文化財専門委員の高橋桂氏を調査担当者とし、専従に望月静雄（市立秋津小学校用務員）があたることになった。調査は緊急を要するものであり、直に準備作業にとりかかった。

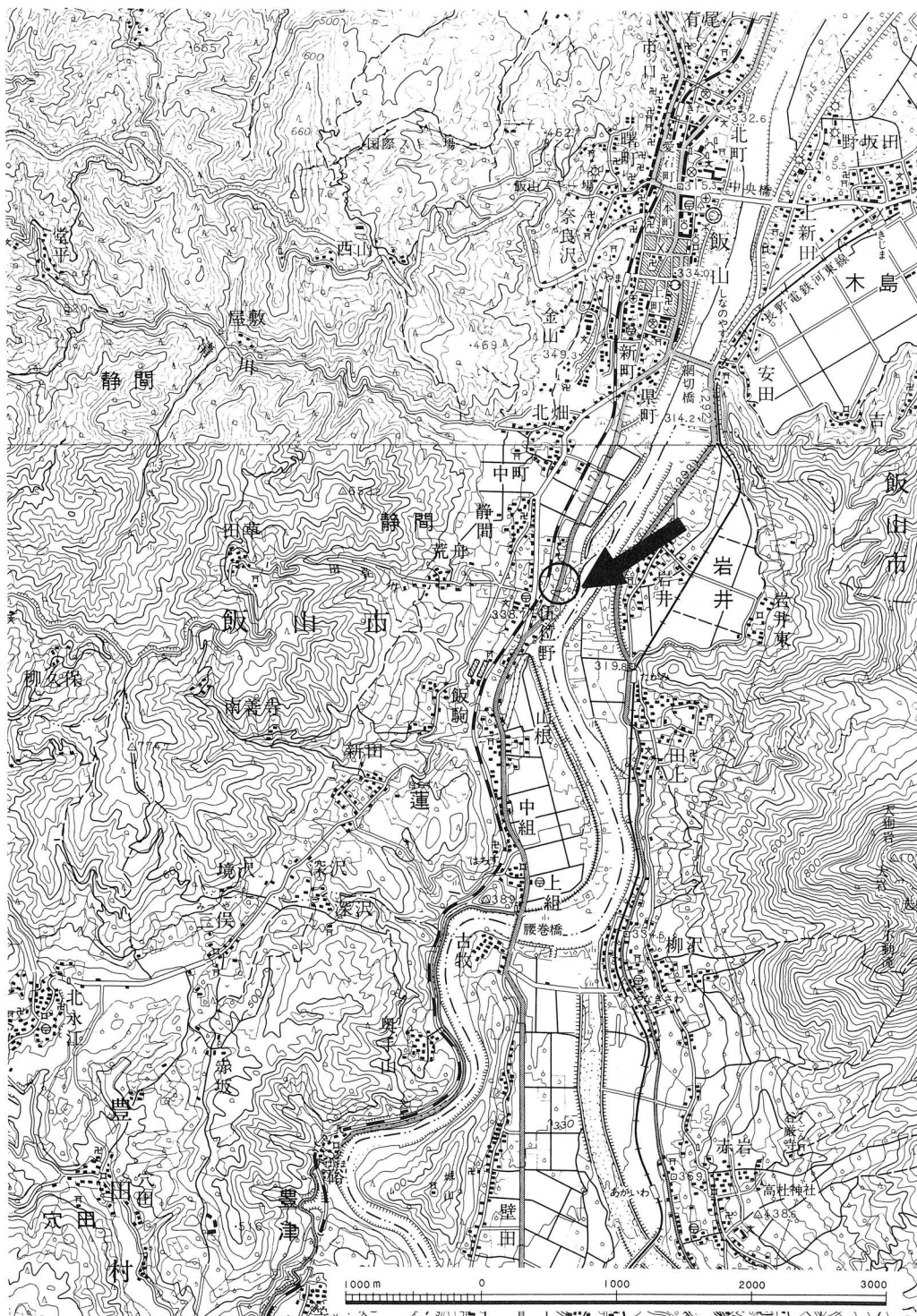
7月4日、緊急発掘調査通知を文化庁に提出し、同5日より発掘器材の搬入、グリット設定を行ない、翌6日より12日まで降雨に悩まされながらも全グリットを調査・完了することができた。

調査区の層序は、耕作土（20cm）の下層が黒褐色混礫土層が厚く堆積している。遺物はこの層の上部より出土するが、東北側低地に向かってさらに厚くなる傾向を見せ、D-1グリットでは表土より1m下より出土する。この堆積物は主に田草川の氾濫による二次堆積物と思われる。

なお、発掘調査が無事終了したことは、飯山市農業協同組合の深い理解に負うところが大きく、特に岸田今朝男秋津事業所長、猪瀬宏理事、丸山篤理事には毎日現場での作業に協力をいただいた。厚く感謝申し上げる次第である。

（調査参加者）順不同・敬称略

田中ノリ子・黒鋸八重子・畔上伊津子・土屋久栄・石沢ちよえ・服部蓮・小林家子・阿部紀子



第1図 遺跡位置図 (1 : 50,000)

## 第Ⅱ章 遺跡概観

田草川尻遺跡は、飯山市大字蓮字北原地籍を中心として、縄文～中世に係る10万㎡に及ぶ一大複合遺跡である（第1図）。

甲信国境に源を発する千曲川は、佐久・上田盆地を流下し、長野市川中島付近で犀川を合わせ肥沃な善光寺平を形成する。善光寺平東縁に至ると東側の長丘丘陵、西側の斑尾山麓の隆起地帯を穿入蛇行する。そして、中野市古牧地区の長丘丘陵北端に至ると再び流域を広げ信濃の最後の平を残す。これが飯山盆地である。飯山盆地を過ぎると信越国境の山岳地帯を再度穿入蛇行し越後へと流れ去る。

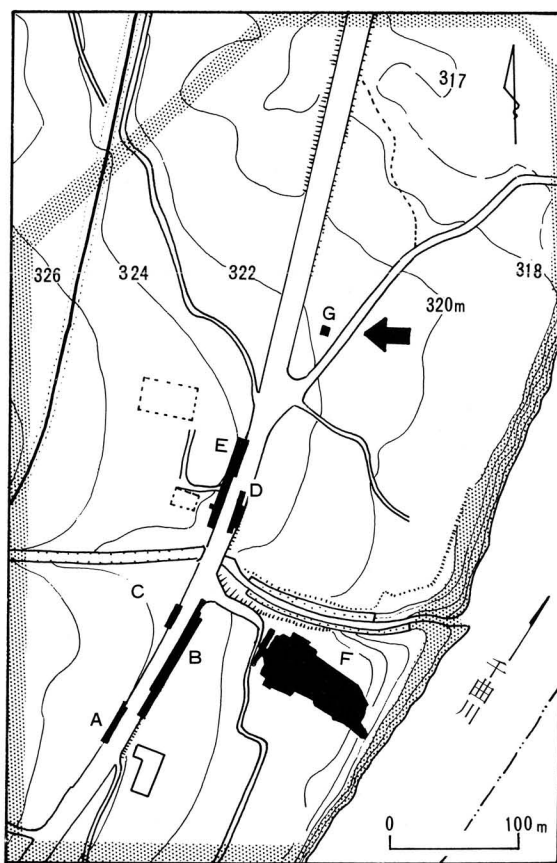
田草川尻遺跡は飯山盆地が展開する最初の地点に位置する。東側に高社山が聳えているために比較的狭長な沖積地を千曲川が流れ、善光寺平と飯山盆地との回廊口的な地点となっている。飯山盆地西縁は上境～鬼坂断層線によって画されているために急傾斜をもって斜面に接している。そのため山地から流出する河川は急流をなし、斜面の急な小扇状地を形成している。遺跡の位置する秋津地区でも三つの扇状地が発達している。すなわち、清川・田草川・宮沢川による各扇状地である。

田草川尻遺跡は、このうち田草川扇状地扇端面に立地する。南側は宮沢川の小扇状地と千曲川沖積地に接しており、北側は清川扇状地との間の低湿地帯に接している。また東側は千曲川が扇状地端部を決るように（攻撃斜面）流れており、その比高差は5m前後である。

田草川尻遺跡は過去2回調査が行なわれている（第2図）。第1回目は昭和47年に国道改良工事（静間バイパス建設）に伴い緊急発掘調査が実施された。A～E地区の約600㎡の調査によって、古墳時代から平安時代にかかる住居址3軒、古墳時代祭祀遺構および多数の土埴群が検出された。さらに、昭和52年工場用地造成に伴い2次調査が実施されたが、弥生期4、古墳時代4、平安時代11の計19軒の住居址群が検出されている。

今回の調査区は田草川の北側に位置し、扇状地性低地に移行する地区にあって、従来より遺物の散布が若干認められるところであった。ただ、第2次調査の行なわれた田草川南区と比較し、いまひとつ分布が明確でない。これは土層の堆積が、南区と違い厚く堆積していることにも起因している。田草川の北側における調査は、第1次調査のD・E区であるが、本区より祭祀遺構、集石が出土しており、南区とは様相を異にしている。今回の調査区は、D・E区よりさらに北へ100m離れている。田草川の流路が遺跡形成に大きく影響しているものと考えられよう。そうい

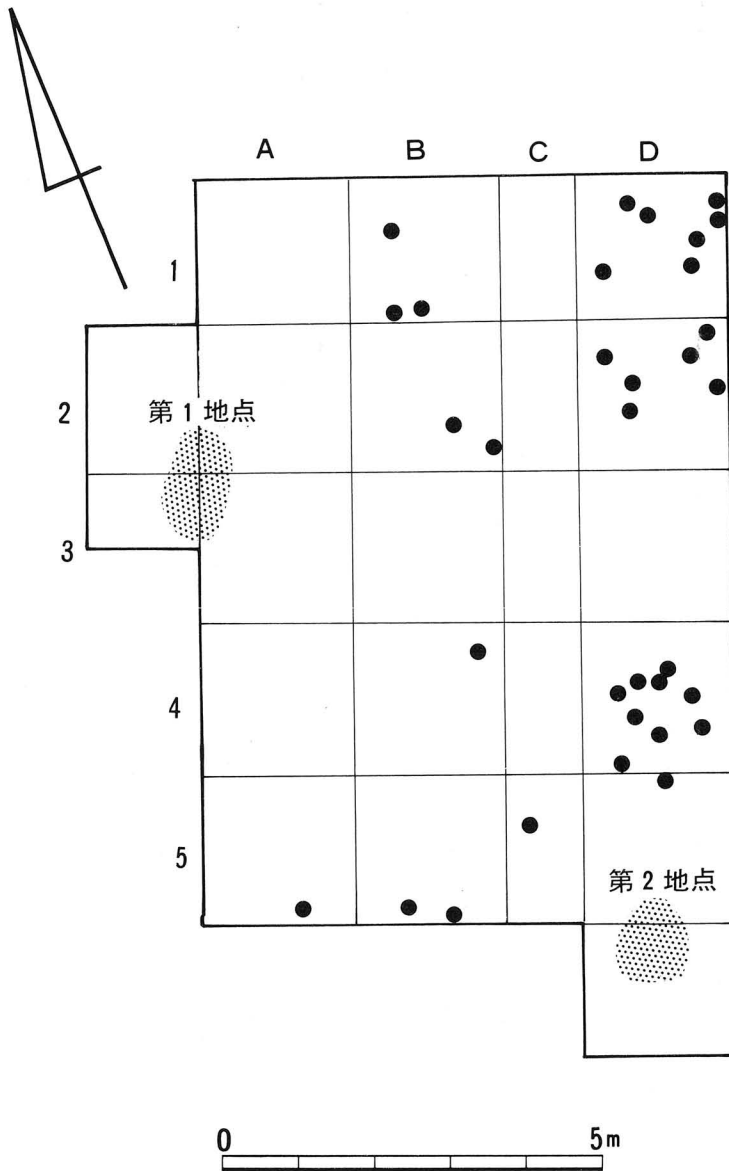
う観点から、今次の調査地区は住居址群よりかなり距離をおいた地点考えてよく、田草川尻遺跡の全体像を究明する上で興味ある地区となっている。



A～E区第1次調査(1972) F区第2次調査(1977)

第2図 遺跡全体図





第3図 グリッド設定図及び主要遺物分布図

### 第三章 調査

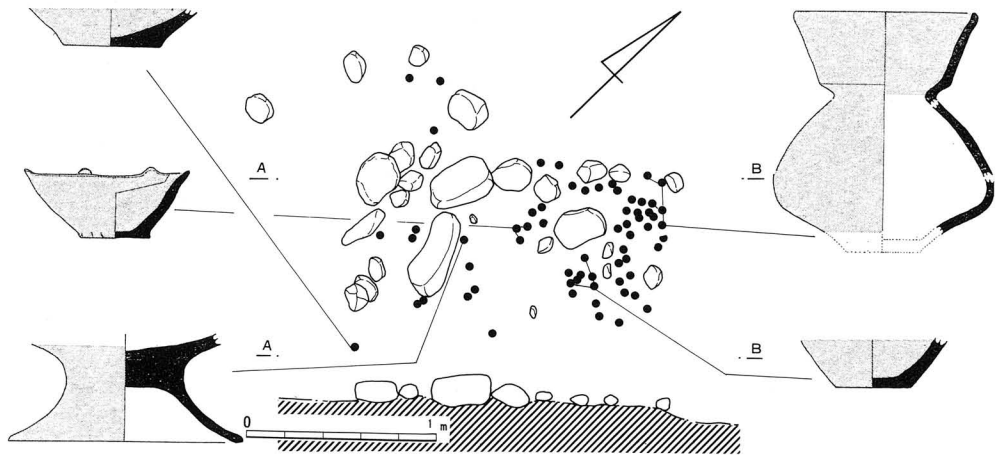
#### 1. 遺物の出土状態について

今次の調査において検出された遺物は、弥生後期・古墳時代後期および平安時代に係る土器である。いずれも調査区内において散在的に出土したものである。ただ、二地点において集中的に出土した箇所が認められたが、遺構かどうか明確に把握することができなかった。

以下に集中的に出土した二地点についてその概要を記す。

##### 第1地点（第4図）

約100点の土器片が集中的に出土した。この他に、最大で人頭大の礫が数個混在して出土しているが、特に意図して配置された形跡はうかがえない。しかし、土器片は1・2例を除けば全て弥生式土器であり、加えて器種的には壺、高坏、小形浅鉢などの特殊な遺物のみが存在しており、ただ単に流れ込みあるいは土器溜りと規定し得ない面も存在している。最も大きな礫は46×20cmで、高坏脚部が接して出土している。個体的には6・7個体である。細片が多く、また丹念に復元作業を行なったが完形となる土器はなかった。

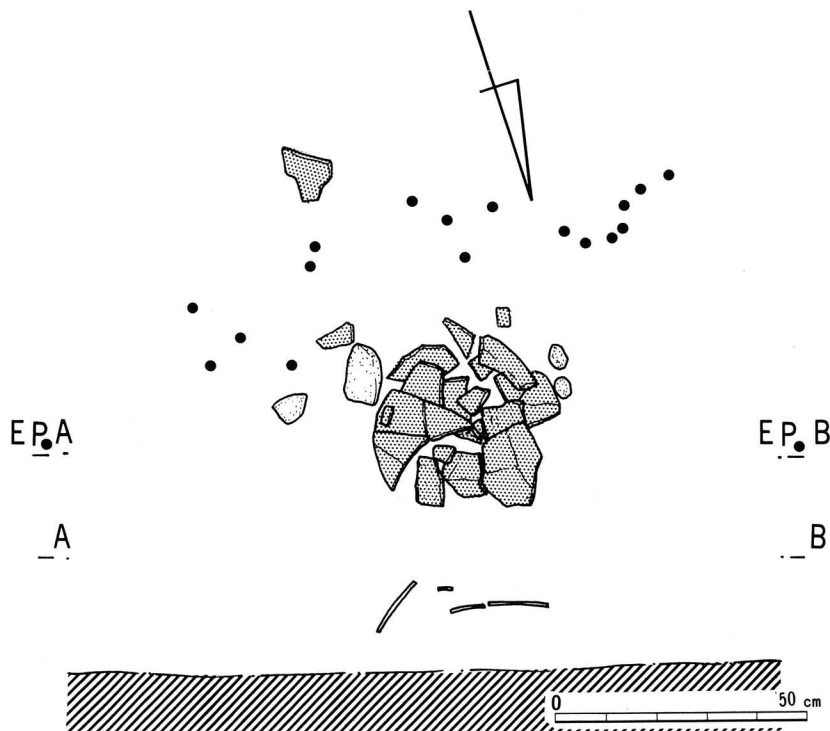


第4図 第1地点遺物分布図

## 第2地点（第5図）

古墳時代鬼高期に比定される甕形土器1個体（第7図7）を中心とする土器集中部である。そのまま潰れた状態を示しており、いわゆる単独出土の様相を呈している。付近に落ち込み等の遺構は存在しなかった。

この他、各グリットより遺物の出土があったが、破片のケースが多く、さらに各時期が混在して出土しており、流れ込みの可能性が高い。第I章で層序について若干触たように、当地区は氾濫地帯と考えられる。地形的にも西南方面より除々に底地へ移行する部分であって、上方よりの流れ込みが十分に考えられるところである。ただ、第一地点については調査区でも若干上方に位置し、弥生式土器が四方に散乱していないことも考え併せると原位置を保っているとも考えられ、祭祀的な遺構とする意見も一概に否定できない。



第5図 第2地点遺物分布図

## 2. 遺物

### (1) 弥生時代後期の土器

土器集中部第一地点の出土で、計5点出土している。

#### 壺形土器（第6図1）

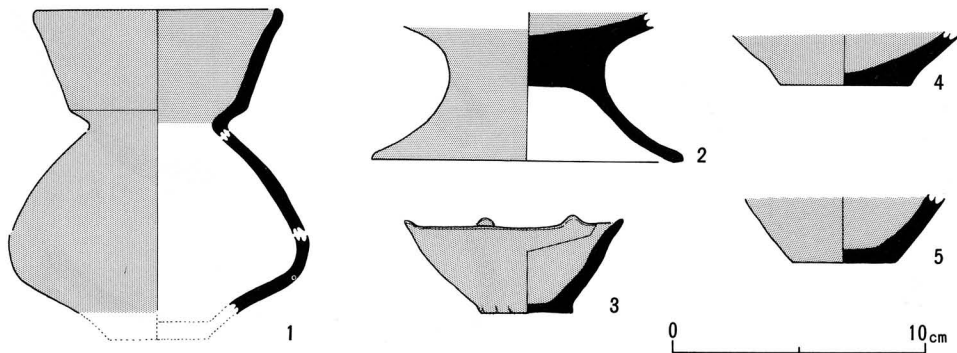
この時期には珍しい器形である。頸部がくの字形に屈折したのち鈍い稜をなし、口縁部が直線的に開く。体部は肩が張り、下半部が内湾ぎみに底部に収束する。外面はヘラミガキがなされ、光沢を持っている。内面はナデ整形が施され、外面全体及び内面口縁部が赤色塗彩される。

#### 高坏形土器（第6図2）

高坏の脚部のみである。短く外反し、裾部が広がる器形を呈している。器表面は丹念にミガキがなされ、赤色塗彩が施されている。坏部内面にも赤色塗彩が施されるが、風化が激しく剥落が著しい。

#### 鉢形土器（第6図3～5）

3点出土している。3・5は小形の手捏土器である。3は3箇所突起をもち、器内外ともに赤色塗彩が施される。底部周辺の内外面に指頭圧痕が認められる。4は底部および底部周辺のみであるが、器内外面ともに赤色塗彩が施される。5は口縁部を欠く。器内外面ともに赤色塗彩が施されるが、内面は風化が激しく、剥落が認められる。



第6図 弥生時代後期の土器

以上、図示し得たのは上記5個体であるが、他に数個体分の赤色塗彩が施された土器片が多く出土している。これらはいずれも1~2cmの細片であって、意図的な破壊かどうか不明であるが興味深い問題である。また、1点のみであるが、櫛描波状文の施文された甕形土器の小破片が出土している。

## (2) 古墳時代後期の土器

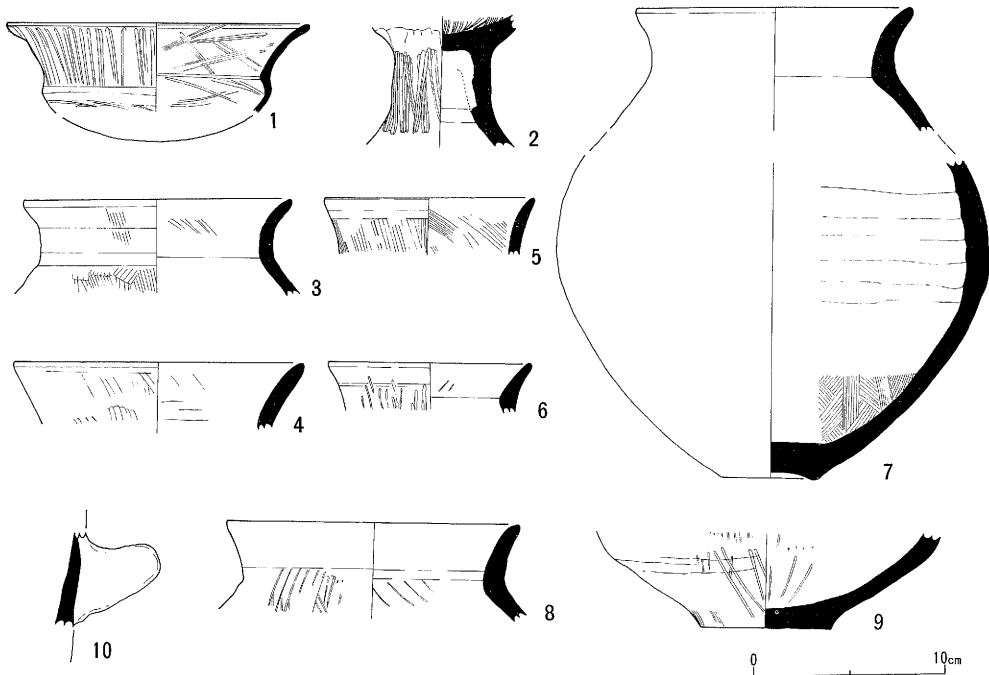
古墳時代鬼高期に比定される土器群である。第二地点、各グリットより出土したものであり、一括して述べることにする。

### 坏形土器（第7図1）

鬼高期のメルクマールとなっている須恵器坏身・坏蓋の模倣である外稜を有する坏形土器である。外面は口縁部ヨコナデの後に縦位のヘラミガキが行なわれ、内面はヨコナデの後全面にヘラミガキがなされている。薄手で焼成は良好である。

### 高坏形土器（第7図2）

脚部のみである。同筒状の脚部で、裾部が広がる形態を示すが、その境は明確でない。脚部外面は縦方向のヘラミガキが行なわれている。坏部内面はハケメ調整がなされ、黒色を呈する。脚部内側は、粘土貼りつけ箇所が剥落している。



第7図 古墳時代後期の土器

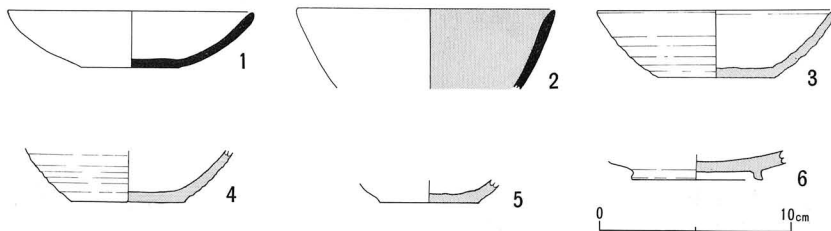
### 甕形土器（第7図3～9）

3はD-4グリット出土で、口縁部が全周する。頸部でいったん直立し、口辺が外反する。ヘラ削りの後ナデ整形が施される。4は直線的に外反する口辺部のみで、全体の形状は不明であるが球胴形に近似した形態を示すものであろう。ヘラケズリが部分的に施された後口唇部のみヨコナデ整形が施される。5・6は小形の部類に入る。5は器内外面ともに刷毛ナデが施され、器表面口唇部にヨコナデ整形が行なわれている。6は黒色を呈する。ヘラミガキがなされた後ヨコナデ整形が施される。7は第二地点出土土器である。和泉期の甕形土器の特徴である球形に近い胴部の形状を器形に留めているが、口辺は和泉期のように強く外反せずに新しい様相を呈している。底部は若干上底となっている。器内胴部付近には輪積み痕が残る。和泉期末期であろうか。8はくの字形に外反する口縁部で、ハケメ調整が施されている。9は底部および胴下半部で、張りのある胴部形態を示している。底部に至る周縁はヘラケズリの後、部分的にミガキが行なわれている。10は甕形土器の把手であろう。当地方では珍しい。

### (3) 平安時代の土器

当時期に比定される土器は小破片が多く、図示し得たのは次の5点で、いずれも坏形土器である（第8図）。

1・2は土師器坏形土器である。1は口径12.9cm、器高3cmで、底部に回転糸切り痕をとどめる。2は内面黒色の土師器坏形土器で、器高は約5cm。この種の土器は底部がヘラ削りされるのが一般的である。3は須恵器坏形土器で、口径12.5cm、器高3.5cmで完形品である。ロクロ整形により、底部に糸切り痕をとどめる。4は口縁部を欠く。3より若干小形品であるが、ほぼ同形態である。5は底部および底部周辺のみで、底部に糸切り痕をとどめている。6は高台付灰釉陶器坏形土器である。



第8図 平安時代の土器

#### (4) 小 括

今回の調査によって得られた資料は弥生後期、古墳時代後期、平安時代の三時期にわたり、断続的に営まれたことがうかがえる。

弥生時代後期の資料は第一地点よりまとまって出土した。個体数は少ないけれども、他時代の遺物の混在がほとんど認められないことから、ほぼ同時期の一括資料と考えて良いであろう。器種別では、壺、高坏、浅鉢の三形態である。壺（第6図1）は珍しい器形であるが、類例は長野市四ツ谷遺跡第30号住居址出土土器<sup>(4)</sup>に求められる。四ツ谷遺跡例は、口縁部が直立ぎみであり、体部も球形になっている。胴下半は不明であるが、本例のようにこけるようにはならないと思われる。また、同遺跡群の清野四ツ谷遺跡隣接地点出土の小形壺<sup>(5)</sup>は、本例のように頸部に稜を持たないが、同一系譜上のものと理解される。

弥生後期箱清水式土器に特徴的な壺形土器にあって、胴下半がこける特徴は本例もまた同様であって箱清水式土器の影響下に出現したものであろう。ただ、器形からはすでに新しい要素が感じられ、壺形土器の形態変移による一様相と感じられる。

次に古墳時代鬼高期に比定される土器群であるが、説明の項でも触れたように和泉期の様相を強く残していることがうかがえる。甕形土器胴部にとどめる球形あるいは高坏形土器脚部に円筒状の形態がそれである。また、坏形土器のように鬼高式土器の特徴を備えたものもある。一括資料ではないので、時期的な差があるかもしれない。資料的制約が多いため、ここでは和泉期末から鬼高期の移行段階～鬼高期中葉頃までの時期とし、時間幅を持たせておきたい。

平安時代の遺物は坏形土器のみであった。土師器では内面黒色を呈する器高の高い土器と底部に糸切り痕をとどめたより新しい様相を呈する土器の両者が存在している。これら二者は時期的に新旧の関係を有するが、全くの時間差を持つのではなく、両者が一時期共存するのが一般的に見受けられる<sup>(6)</sup>。したがって、本稿では一括資料ではないこともあって平安中期（10世紀）以降としておきたい。

## 第Ⅳ章 まとめ

田草川尻遺跡は、昭和47年、昭和52年の二度にわたって発掘調査が実施され、縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良・平安時代にわたる大複合遺跡であることが判明した。中でも弥生時代後期の土器は、北信地方の弥生式土器編年・編成にとって重要な資料となった。更に鬼高期の住居址及び出土土器は弥生式後期土器と同様に北信地方とりわけ飯水岳北地域における古墳時代の庶民生活の実態を知る上に貴重な材料を提供するとともに、飯水岳北地域の古代交通路を示唆する手懸りを我々にあたえてくれた。更に鬼高期末期における2基の祭祀遺構は、古代の祭りのあり方の一端を示してくれた。また、国分期の住居址及び出土土器は平安時代の雪深い飯水岳北地方の庶民生活の実態を如実に示した。

今回の調査は、叙上の2回にわたる発掘調査の成果の上に実施された。調査の成果は小括において述べてある通り、弥生後期末期の土器、古墳時代鬼高期の土器及び平安時代中期に比定される土器・須恵器であった。弥生式土器は資料が僅少ではあったが、飯水岳北地方の弥生式終末期の土器様相を知る上に貴重な資料となるであろう。

住居址及びその他の遺構は明確に検出し得なかった。

さて、今回の調査は飯山市農業協同組合のガソリンスタンド建設に伴う緊急発掘調査であった。それだけに用意周到の調査という訳にはいかず、調査者としては精一杯の努力をしたつもりではあるが、泥縄的調査の感は否定できない。

思えば、田草川尻遺跡は静間バイパス通過以前は遺跡の保存状態も良好でまさに遺跡としてはこの上ないものであった。しかしながらバイパス通過後の遺跡地は大きく変貌しつつある。そして今、関越道自動車の建設に伴う飯山の引込線計画、北陸新幹線の計画等従来ともすると開発がおくれていた当地方も次第に開発の波が押し寄せつつある。当地方の経済的発展は地域の住民として当然願う訳けであるが、開発は同時に私達の祖先が残した貴重な文化財を破壊する行事であることを心にしっかり刻みつけておきたい。恐らく新幹線の通過・関越自動車道が敷設されたならば、秋津地区は飯山市の開発地域として脚光を浴びることになるであろう。現に飯山市は現在の市街地から南へ南へと発展しており、工場団地・住宅団地の計画もあるやに聞いている。

田草川尻遺跡をはじめとして飯水岳北地方の主要な遺跡が秋津地区には多く存在する。開発計画とともにきめ細かくしかも大胆な文化財保護の計画立案が一日も早くなされることを心から願うものである。

終りに本調査に御指導、御協力を頂いた皆さんに心から感謝申し上げます。



## 註・参考文献

- (1) 飯山北高等学校地歴部OB会 1977 「遺跡分布調査報告Ⅰ」
- (2) 高橋桂・松沢芳宏 1973 「飯山市田草川尻遺跡緊急発掘調査報告書」 飯山市教育委員会
- (3) 飯山市田草川尻遺跡調査団 1978 「田草川尻遺跡Ⅱ」 飯山市教育委員会
- (4) 矢口忠良ほか 1980 「四ツ谷遺跡・徳間遺跡・塩崎遺跡群(3)」 長野市教育委員会
- (5) 森島稔ほか 1978 「更級・埴科地方誌」 第2巻 更級埴科地方誌
- (6) 高橋桂・望月静雄 1980 「旭町遺跡群北原遺跡調査報告書」 飯山市教育委員会  
秋津村誌編纂委員会 1966 「秋津村史」



遺跡遠景（東より）昭和47年撮影



調 査 風 景



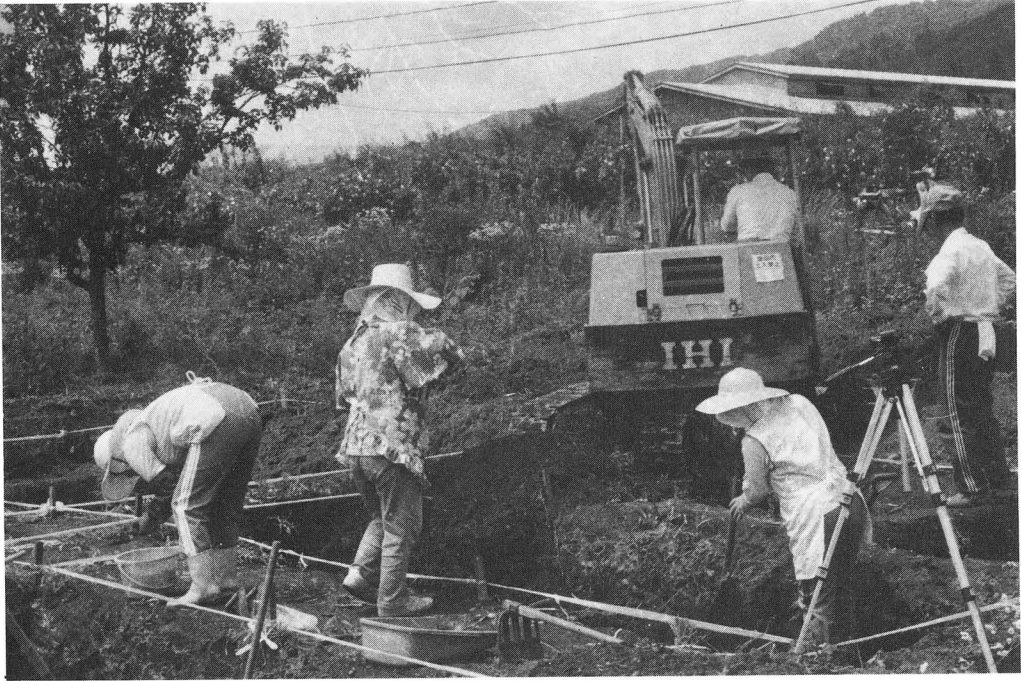
調 査 風 景



第1地点（南より）



第2地点（北より）



調 査 風 景



調 査 区

# 清川尻遺跡調査報告書

1978

飯山市教育委員会

## 例 言

1. 本書は、長野県飯山市大字静間字小屋解地籍に所在する清川尻遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、工場用地造成工事に伴う緊急発掘調査であり、飯山市都市開発公社から委託を受けた飯山市教育委員会が事業主体となって実施したものである。
3. 現地調査は、昭和52年4月15日～5月8日まで行なった。
4. 本書の作成は調査員大原が主体となり全員で行なった。執筆は調査員望月が行ない、高橋団長の校閲を受けた。
5. 出土遺物は飯山市教育委員会が保管している。

## 目 次

### 例言

1. 環境	1
2. 経過	2
3. 調査	5
4. おわりに	7

### 挿図目次

第1図 遺跡位置図	3
第2図 調査区	4
第3図 グリット設定図及び遺構配置図	5
第4図 a号住居址実測図	6
第5図 b号住居址実測図	7
第6図 c号住居址実測図	8

### 写真図版

図版1 遺跡近景（北より）	
図版2 b号住居址・c号住居址	

# 1. 環 境

清川尻遺跡は、田草川尻遺跡の北方約1.2kmに位置し、地籍は飯山市大字静間字小屋解55～104、107～114、139～149他に所在する。

斑尾山麓の湧泉に源を発する清川は、第三紀層を基盤とする山地を流下し、北畑地区上方（西）で谷口をつくり急斜な扇状地を形成する。中町付近に至って緩やかな面になるが、清川は下刻し急流をなしている。千曲川流入付近は低地となっており、現在は提防が構築されている。遺跡は、この提防と清川・千曲川に挟まれた地点に立地する。

土地利用は畑であるが、砂質土であり作物栽培には不適である。

# 2. 経 過

清川尻遺跡発掘調査は、昭和52年4月15日より開始した。同時に田草尻遺跡を開始したため、比較的広範囲に及ぶ田草川尻遺跡に主力を置き、その合間に本遺跡を調査するという方法を採用したため変則的な調査日程にならざるを得なかった。なお、調査に至るまでの経過は、昭和53年2月刊行予定の「田草川尻遺跡Ⅱ」に詳しいので省略する。調査会・調査団についても同様であるが、下記に掲げておきたい。

## 飯山市清川尻遺跡調査会（昭和52年度）

会 長	小 林 忠 一	飯山市教育委員会教育長
副 会 長	荒 井 博 美	飯山市教育委員会教育次長
顧 問	春 日 佳 一	飯山市長
	上 原 信 重	飯山市議会議長
	坪 井 富 永	飯山市公民館秋津分館長
理 事	佐 藤 政 男	飯山市文化財専門委員
	齊 藤 二 六	〃
	弓 削 春 穂	〃
	上 原 幸 夫	〃
	高 橋 桂	〃
監 事	宮 沢 忠 志	飯山市収入役
	松 沢 定 男	飯山市監査委員



事務局 青木 剛 飯山市教育委員会社会教育係長  
指導 丸山 敬一郎 県教育委員会文化課指導主事  
関 孝 一 ”  
桐原 健 ”

#### 調査団

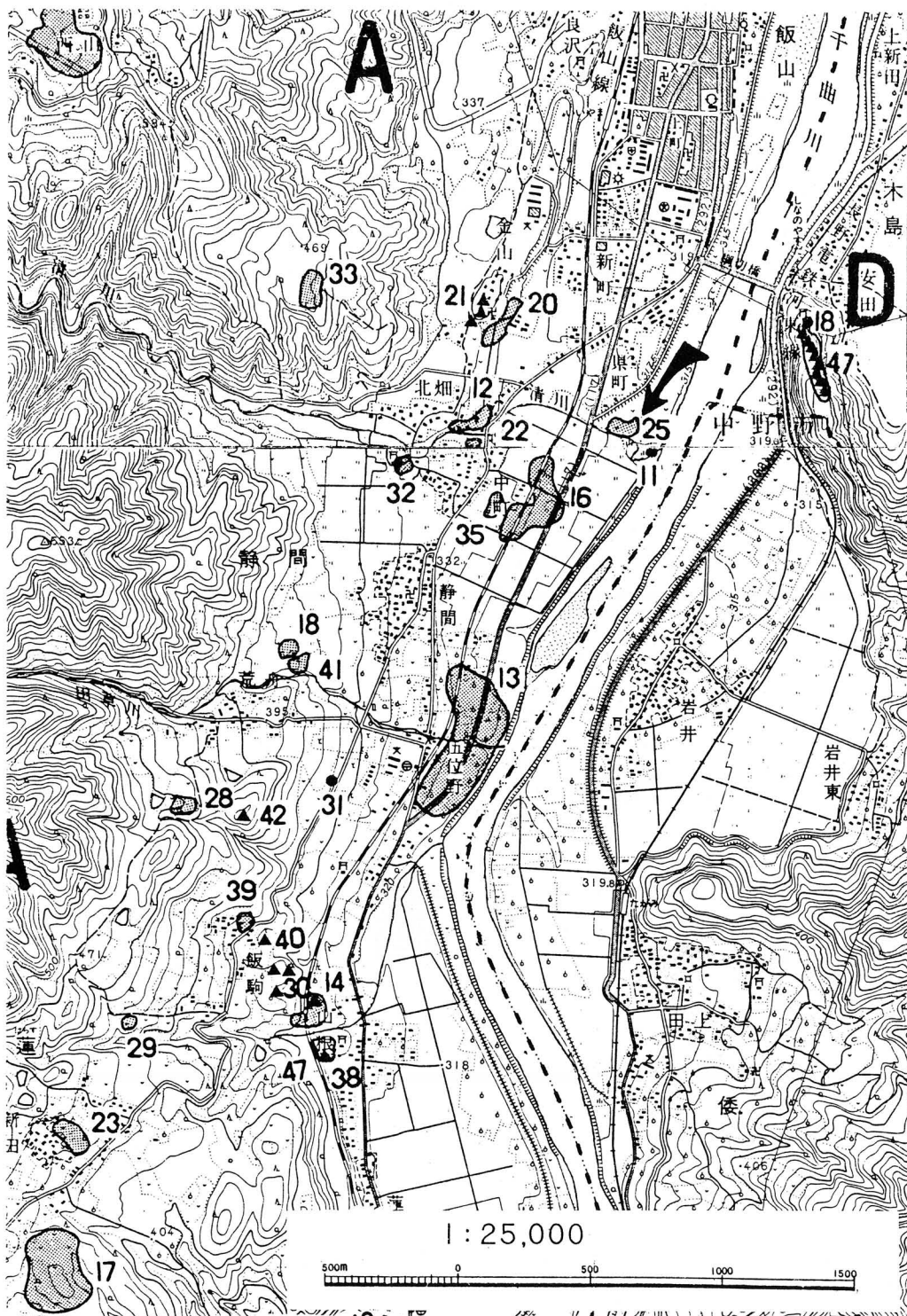
団 長 高橋 桂 飯山北高等学校教諭  
主 任 松沢 芳宏 日伸精機株式会社  
調査員 大原 正義 千葉県文化財センター  
金井 正三 須坂市教育委員会  
太田 文雄 国学院大学学生  
望月 静雄 立正大学学生  
西沢 隆治 立正大学学生  
今井 正文 立正大学学生  
菊地 実 国学院大学学生  
野沢 則幸 立正大学学生  
西井 幸雄 立正大学学生  
補助員 松沢 伸一  
調査協力者 中島 庄一、熊川 英子、黒沢 晴美、広瀬 昭弘  
飯山南高等学校考古学クラブ

調査は前述したように田草川尻遺跡調査の合間を縫って行なった。これは、面積的に小規模な調査であることと、遺物の散布が明確でないことから、調査に大幅な時間を要しないだろうとの判断からである。さらに、田草川尻遺跡において、遺構が密集して出土したため調査員が田草川尻遺跡で手が離せない状態になってしまったためである。

4月20日、西沢・今井・菊池の3名がグリット設定を行なう。

4月24日、西沢・今井・菊池・野沢・西井・望月の6名が遺構の検出作業を行なう。A～E-1～6グリット間に遺構と思われる落ち込みを確認する。しかし、砂礫のためスコップが入らず断念。

4月26日、午前9時より重機により約20cm剥ぐ。その他の区域で明確な遺構は検出出来ず、30分で終了する。



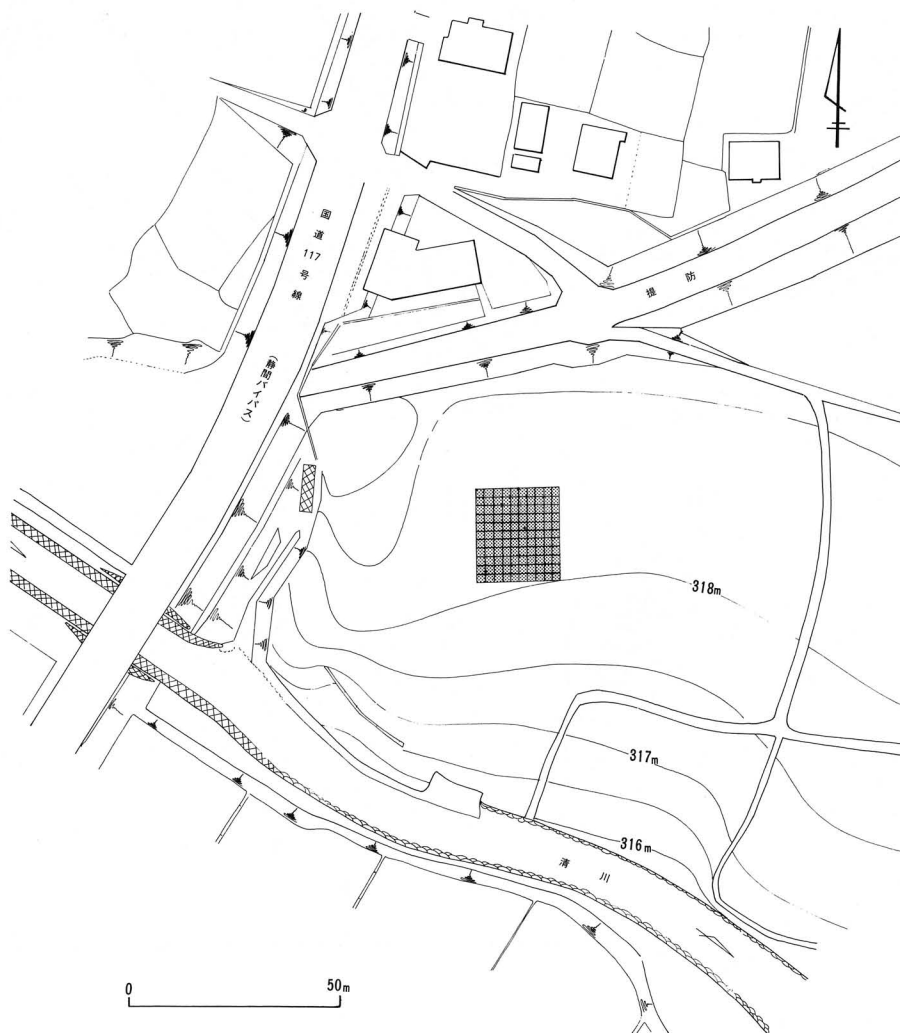
第1図 遺跡位置図

5月1日、3ヶ所の落ち込みを精査の結果住居址と判明。それぞれa～c住と呼称することにする。a住を掘り下げる。甕口縁部破片が出土。

5月2日、b・c住を掘り下げる。遺物はほとんど出土しない。細片から観察すれば、平安期(国分期)の土器片と思われる。

5月4日、各住居址の清掃・写真撮影を行ない、その後平面実測を行ない全て完了する。

以上、約460㎡の調査であったが、平安時代に比定される住居址3軒を検出した。本地区は千曲川河岸に立地することから砂礫の堆積が厚く、そのため調査ではかなり難渋した。

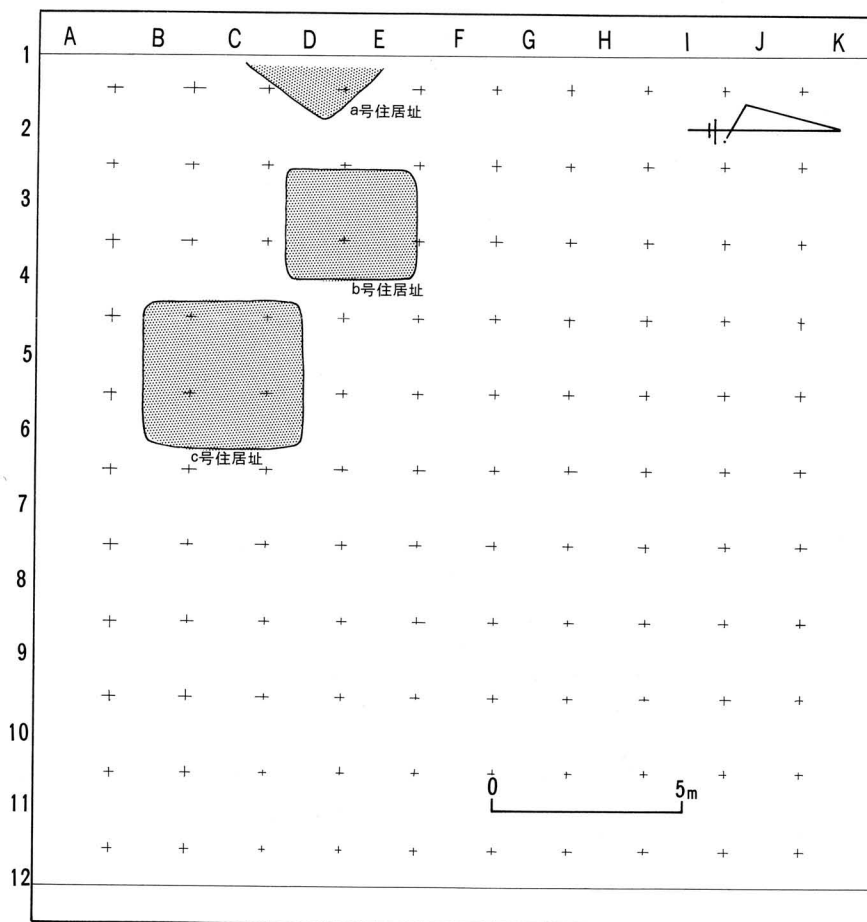


第2図 調査区

### 3. 調 査

今回の調査によって検出された遺構は、平安時代に比定される住居址3軒である。遺物は各住居址より若干出土したが、いずれも細片であり、さらに砂質粘土層に包蔵されていたためか磨滅しており、復元実測し得る土器はなかった。

以下に、出土した3軒の住居址について説明を加えたい。



第3図 グリット設定図及び遺構配置図

### a号住居址

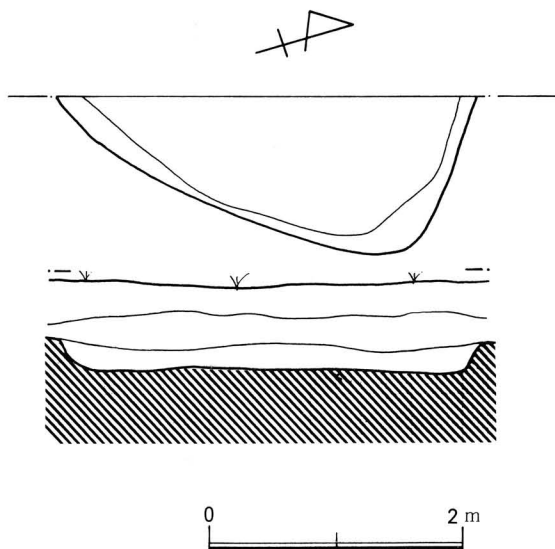
C～E・1～2グリットに位置する。東側の約半分しか検出し得なかったため、全体の規模・形状を把握できなかったが、3m前後の方形プランを呈するものと思われる。壁の立ち上がりは明確で、床面も堅緻である。カマドは検出できなかったが、南東乃至西南コーナーに存在するものであろう。柱穴等も確認できなかった。

層序は、①耕作土・②黄褐色砂質混礫土層・③覆土（黄色砂質粘土層）であり、いずれも非常に堅緻であった。

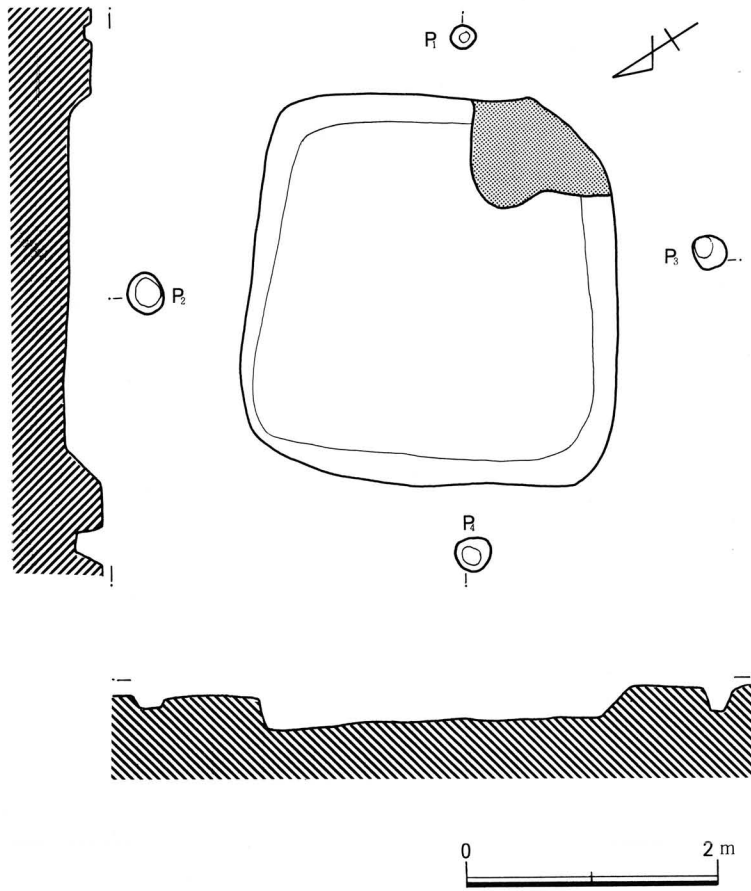
遺物は、甕形土器口縁部破片等若干出土したが、実測可能な土器片はなかった。

### b号住居址

D・E-3・4グリットに位置する。軸長3.1×2.9mを測り、南隅にカマドを持つほぼ方形の住居址である。各壁外周の中央寄りに各1本の柱穴が存在する。Pは径21cm、深さ8cm、Pは径28cm、深さ10cm、Pは径24cm、深さ20cm、Pは径29cm、深さ21cmを測る。カマドは粘土で構築されている。壁高は約25cmで明確である。床面もしっかりしている。



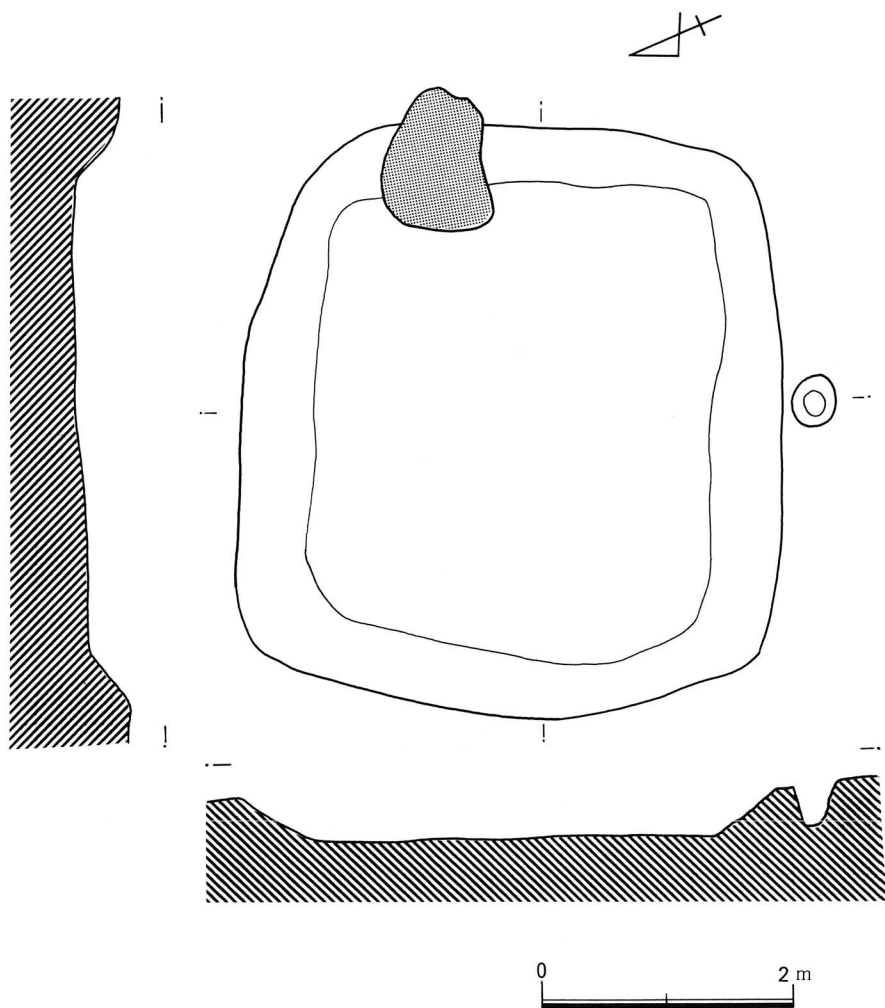
第4図 a号住居址 実測図（1/60）



第5図 b号住居址 実測図 (1/60)

### c号住居址

B～D・4～6グリットに位置する。軸長4.8×4.2mの長方形プランを呈する。本調査によって検出された住居址中最も大きな規模を持つ。カマドは東壁の北隅よりに構築されている。西壁外縁に1本のピットが存在する。深さは23cmを測る。壁はなだらかに立ち上るがしっかりしている。床面も平坦で堅緻である。



第6図 c号住居址 実測図 (1/60)

#### 4. おわりに

飯山市秋津地区の田草川・清川両扇状地扇端面は、昭和47年の静間バイパス建設、及びは場整備事業の施行により大きく景観が変化した。今回の調査もこの開発によって企業の進出が始まったことに起因している。

清川尻（小屋解）遺跡は、昭和40年代に松沢芳宏氏によって発見された。本遺跡の東側、清川が千曲川に流入する直前の両側には縄文後期の清川遺跡が存在している。清川遺跡は古くより存在が確認されており、長野県遺跡地図（昭和42年刊）ではNo.6962として記載されている。このた

め、両遺跡が混同される恐れがあるため今後小屋解遺跡と呼称していきたいと考えている。(本書では書類上の関係で清川尻(小屋解)遺跡とした)

さて、今回の調査によって平安時代に比定される住居址を3軒検出することができた。遺物は、遺存状態が悪く図化出来る資料がなかった。しかしながら本地区において平安時代の生活址を検出し得たことは大きな成果であった。

田草川・清川両扇状地扇端面には、田草川尻・中町郷谷の各遺跡があり、いずれも平安時代の遺物が多量に採集されている。特に田草川尻遺跡では11軒の該期住居址が検出されており、ムラの中核部として扱えられよう。また、中町郷谷遺跡(第1図16)では柳町期～国分期の土器片がほ場整備に際し多量に出土した。無残にも破壊されてしまったけれども本地区に平安時代の生活址が存在していた事はまず間違いのないところであろう。田草川尻遺跡において弥生後期の集落址が出土しているが、以降除々に開拓され、平安時代には扇状地扇端部全体がすでに開拓されていたのではあるまいか。

清川尻(小屋解)遺跡は、こうした扇状地扇端部全体の一集落として存在していたと考えられるのではないだろうか。

最後になってしまったが、本調査に御指導・御協力をいただいた諸氏・諸機関に対して厚く御礼申し上げたい。

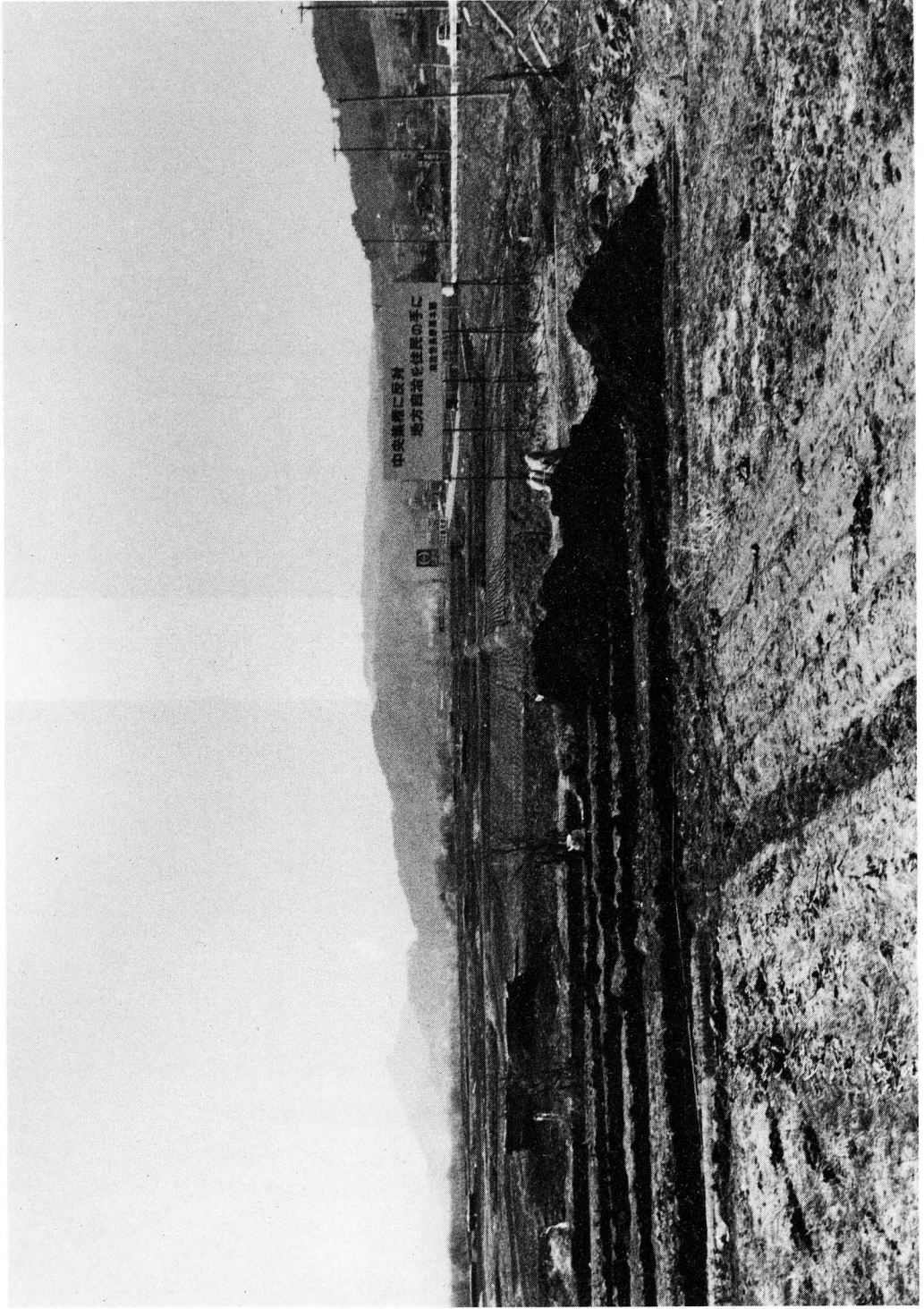
#### 参考文献

飯山北高等学校地歴部OB会編 1977 「遺跡分布調査報告」

高橋桂・松沢芳宏 1973 「飯山市田草川尻遺跡緊急発掘調査報告書」 飯山市教育委員会

飯山市田草川尻遺跡調査団編 1978 「田草川尻遺跡Ⅱ」 飯山市教育委員会(2月刊行)





調查區近景



b号住居址



c号住居址

飯山市埋蔵文化財調査報告

第1集	飯山市田草川尻遺跡緊急発掘調査報告書	1973.2
第2集	宮中遺跡——分布確認調査報告——	1979.2
第3集	北原遺跡	1979.2
第4集	北原遺跡調査報告書	1980.6
第5集	鍛冶田	1980.6
第6集	北原遺跡Ⅲ	1981.2
第7集	太子林・関沢遺跡	1981.3
	田草川尻遺跡Ⅱ	1978.3

飯山市埋蔵文化財調査報告第9集

田草川尻遺跡Ⅲ

付 清川尻遺跡調査報告

昭和59年1月20日印刷

昭和59年1月25日発行

編集 } 飯山市教育委員会  
発行 } 飯山市大字飯山1110-1

印刷 三和印刷株式会社  
長野市川中島町1822-1

